

文京区におけるアレルギー健診について

岩田 力
早川 浩
高嶋 宏哉

要約：文京区のアレルギー健診から必要があると判断された者147名中122名が東大分院小児科を受診し検査を受けた。受診時の状態からアトピー性皮膚炎と診断されたものは疑い例も含めて95名であった。血液検査にて総IgE値が50単位以上の明らかな高値を示した者は18名おり、RASTでは卵白に対してスコア2以上の陽性所見は121名中43名(35.5%)に見られた。牛乳は13名(10.8%)、大豆は119名中4名のみ陽性であった。1年後のアンケート調査では122名中87名の解答が得られ、東大分院小児科受診時の診断でアトピー性皮膚炎もしくはその疑いとされた者68名中35名が同疾患を継続してっており、そのうち4名に気管支喘息がみられた。異常なしと判定された者16名から1名気管支喘息が発症したが、その例はIgE低値、RASTも陰性であった。少数例ではあるが健診時における栄養法と1年後における有疾患率には有意な差はみられなかった。健診事業の継続調査を通じて乳児期早期の栄養法とアレルギー性疾患発症との関連を更に考察していく必要がある。

東京都文京区では気管支喘息発症予防を目的とし4-5ヵ月児を中心に乳幼児アレルギー健康審査を平成元年度より実施しているが、東大分院小児科にて行なった検査結果と、健診後1年を経過した時点でのアンケート調査によりこれまでに明らかとなったことを報告する¹⁾。臨床検査が必要と判断された147名中実際に東大分院小児科を受診したものは122名(男61名、女61名)であり、そのときの診断は表1のごとくである。また、採血を行なった結果、血漿総IgE値とRASTスコアは表2-4に示す通りである。検出頻度の高いものはやはり卵白で、スコア2以上を陽性とする121名中43名(35.5%)が陽性であり、次いで牛乳が13名(10.8%)であった。大豆は

119名中4名のみ陽性であった。このうち総IgE値が10未満であるにもかかわらず卵白に対して陽性であったものが7名あり、うち2名はスコア3であった。卵白に対して陽性であったものは全例アトピー性皮膚炎疑い以上に含まれている。

健診後1年を経過したものにアンケートを行ない122名中87名の解答を得た。健診時にアトピー性皮膚炎と診断されたもののうち疑い例を含めて68名がアンケートに解答し、1年後も引続きアトピー性皮膚炎を持つ者は35名(51.5%)であり、そのうち4名に気管支喘息がみられた(表5)。健診時に異常なしと判断された者16名のうちアトピー性皮膚炎になった者が5名(31.3%)、1年たっても

岩田 力(東大分院小児科)、早川 浩(東大分院小児科)、
高嶋 宏哉(帝京大小児科)

異常を認めない者は9名(56.3%)であったが、このグループから1名の気管支喘息と診断されたものが出現している。この例は血清総IgE値は10単位未満で、RASTも卵白、牛乳、大豆いずれについても陰性であった。健診時の栄養法が母乳であったものと混合または人工栄養であったものを65名において比較したが、1年後の有疾患率に関しては差がなかった。

考察

アトピー性疾患を持つものを出来るだけ早期に発見して、適切な指導と治療を行なうとともにまだ発症していない場合にもその危険因子を検索しようという目的をもってアレルギー健診事業が行なわれている。現在も引き続き行なわれており、1年後のアンケートについても継続して行なっている。例数は少ないが、生後5-6カ月の時点で既に血清総IgEが50単位以上の児については、採血時点で全例アトピー性皮膚炎もしくはその疑いであった。そこでアンケート解答者全例をIgEが10単位以上のものと10単位未満のものに分けて現症を健診時とアンケート時に分けて比較すると表6に示すように受診時においてのみ有意な差を認め、1年後の現症では2群間に差は認められなかった。臍帯血或は新生児血における血清IgE値が将来のアレルギー性疾患の予知因子として重要であるとの説が強いが、今回の研究においてはIgEの測定は外注によるものであるため測定限界を10単位に区切っている。そのため10未満という値がはたしてどの程度であるかは明らかで

はないが、そのような例においても卵白に対する反応を示す場合があり、RAST法の重要性を再認識している。極端な例として、問診で聞く限りにおいて人工栄養であり、離乳食中に卵白を加えていない生後5-6カ月の時期に既に卵白に対してRAST陽性の例があった。受診時における栄養法とアンケート時における有疾患率の比較では有意な差はでなかったが、母体の妊娠中から卵・牛乳の除去食を行なった群とそうでない群との比較で気道アレルギーの出現に関しては除去食の効果はなかったとするスウェーデン一派の説^{2,3)}を念頭に入れてこのような健診事業を更に進めていく必要がある。

文献

1. 岩田 力、早川 浩、他：東京都文京区におけるアレルギー健康診査について(第2報)。小児科臨床 43:2645-2650,1991
2. B.Bjorksten : Prediction and Prevention of Allergy. in Mini-Symposium "Prediction and Prevention of Allergy" XIV ICACI, October 14, 1991, Kyoto, Japan
3. K. Falth-Magnusson : Predictive Aspect, and Important of Diets and Pollution. in Concurrent Symposium "Pediatric Allergy" XIV ICAC, October 18, 1991, Kyoto, Japan

表1：東大分院小児科における診断

| 東大分院小児科における診断 | 例数 (%) | (1歳以上) |
|-----------------|-----------|--------|
| アトピー性皮膚炎 (確) | 43 (34.4) | (2) |
| アトピー性皮膚炎 (疑) | 52 (41.6) | (3) |
| 気管支喘息 (確) | 2 (1.6) | (1) |
| いわゆる喘息性気管支炎 (疑) | 3 (2.4) | (0) |
| 脂漏性湿疹 | 1 (0.8) | (0) |
| 異常なし | 24 (19.2) | (2) |
| 合計 (延べ例数) | 125 (100) | (8) |

表2：血清総 IgE 値の分布 (4ヵ月健診経由のもの)

血清 IgE 値 (R I S T 法) (採血時月齢 4 - 11ヵ月)

| IgE 値 IU/ml | 例数 (%) |
|-------------|------------|
| 10未満 | 57 (50%) |
| 10~50未満 | 38 (34%) |
| 50~100未満 | 9 (8%) |
| 100以上 | 9 (8%) |
| 合計 | 113 (100%) |

表3：血清総 IgE値の分布（アレルギー健診直接受診のもの）

血清 IgE 値（RIST法）（採血時月齢11-22ヵ月）

| IgE 値 IU/ml | 例数 |
|-------------|----|
| 10未満 | 2 |
| 10～50未満 | 2 |
| 50～100未満 | 2 |
| 100以上 | 1 |
| 合計 | 7 |

表4：検索されたアレルギーとIgE-RASTスコア

| アレルギー | 例数 | R A S T ス コ ア | | | | |
|-------|-----|---------------|----|----|----|---|
| | | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 卵白 | 121 | 68 | 10 | 20 | 21 | 2 |
| 牛乳 | 120 | 97 | 10 | 11 | 2 | 0 |
| 大豆 | 119 | 114 | 1 | 4 | 0 | 0 |
| ダニ | 57 | 51 | 3 | 1 | 2 | 0 |
| HD | 45 | 45 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 小麦 | 38 | 35 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 米 | 32 | 27 | 4 | 1 | 0 | 0 |
| タラ | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 羽毛 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| インコ | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| ネコ | 4 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| イヌ | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| その他 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |

表5：東大分院小児科受診時の診断とアンケート時現症の比較

| 受診時 | アンケート時 |
|----------------------|--|
| アトピー性皮膚炎（確・疑） 68例 | アトピー性皮膚炎 35例(51.5%) いわゆる喘息性気管支炎 9例(13.2%) 気管支喘息 4例(5.9%) かぜをひきやすい 3例(4.4%) じんましん 1例(1.5%) 異常なし 22例(32.4%) |
| いわゆる喘息性気管支炎（疑） 2例 | 気管支喘息 1例(50%) 異常なし 1例(50%) |
| 脂漏性湿疹 1例 | 異常なし 1例(100%) |
| 異常なし 16例 | アトピー性皮膚炎 5例(31.3%) 気管支喘息 1例(6.3%) じんましん 1例(6.3%) 異常なし 9例(56.3%) |

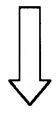
表 6 : 受診時の血清 IgE 値が 10 未満または 10 以上であったもの 2 群の比較

| 東大分院小児科 受診時の診断 | 総 IgE 値 (u/ml) | |
|-------------------|----------------|-----------|
| | 10 未満 (例) | 10 以上 (例) |
| 異常なし | 17 | 5 |
| 異常あり | 42 | 56 |

χ^2 検定で有意差あり ($p < 0.005$)

| アンケート時 (1年後)の診断 | 総 IgE 値 (u/ml) | |
|--------------------|----------------|-----------|
| | 10 未満 (例) | 10 以上 (例) |
| 異常なし | 18 | 16 |
| 異常あり | 22 | 31 |

χ^2 検定で有意差なし



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:文京区のアレルギー健診から必要があると判断された者147名中122名が東大分院小児科を受診し検査を受けた。受診時の状態からアトピー性皮膚炎と診断されたものは疑い例も含めて95名であった。血液検査にて総IgE値が50単位以上の明らかな高値を示した者は18名おり、RASTでは卵白に対してスコア-2以上の陽性所見は121名中43名(35.5%)に見られた。牛乳は13名(10.8%)、大豆は119名中4名のみ陽性であった。1年後のアンケート調査では122名中87名の解答が得られ、東大分院小児科受診時の診断でアトピー性皮膚炎もしくはその疑いとされた者68名中35名が同疾患を継続してっており、そのうち4名に気管支喘息がみられた。異常なしと判定された者16名から1名気管支喘息が発症したが、その例はIgE低値、RASTも陰性であった。少数例ではあるが健診時における栄養法と一年後における有疾患率には有意な差はみられなかった。健診事業の継続調査を通じて乳児期早期の栄養法とアレルギー性疾患発症との関連を更に考察していく必要がある。